



# シリーズ 子どもたちの発達

## 『乳児期に育てる本当の“かしこさ”とは？』

～『0歳からでは遅すぎる！』『EQこころの知能指数』など

大脳生理学、DNA研究から見た乳児教育をどう考える？！～

子どもを持つ親の願いとして共通するものに、「我が子がより賢く、思いやりのある子に育てて欲しい」ということがあります。さて、それを実現する「正しい子育て法」とは具体的にどのようなものなのか？あるとしたら果たしてそれは本当なのか？と考えたことはありませんか？！

現在、胎教から始まって生まれてすぐの乳児期から行う「超早期教育」という考え方や能力開発方法が育児や知育として、いたるところで紹介されています。その中で、大きな根拠とされているのは、大脳生理学という学問の発達や遺伝子(DNA)をめぐる研究が進んできたことで、今までわからなかったような人間の赤ちゃんからの発達のメカニズムやプロセスが部分的に解明されつつある・・・という事です。大脳生理学をプログラムの根拠として扱い、超早期教育の「必要性」を強調している教材や教室の紹介内容には共通点があります。それを簡単にまとめると、

- ① 人間の脳の発達は3歳までに約80%、6歳までに約90%の割合で完成するので、それまでに刺激を与え、脳の神経回路が複雑に絡み合った状態に発達させることが望ましい。
- ② 天才的な脳をつくる為には、脳の大きさよりも軸索の太い神経線維の絡み合いが複雑である神経回路をつくることが重要。
- ③ これらが脳の臨界期（約3歳とされている）までに適切に育てられないと、脳にはそれまでに使ったことがあるネットワークしか残らないので発達に限界をもたらす。

という理論です。

このような説明を大脳生理学の発達専門用語を散りばめて聞いた時、どのように思われるのでしょうか?!確かに現代の人間の生活はオートメーションでコ ンビニエントな「受身」の環境であり、自然の中で大脳にたっぷり刺激を受け、脳 を、身体をフル回転させ豊かな経験をしていくことがとても難しい時代だといえるでしょう。そして、子どもの発達を促したり、教育的な環境を与えることが 難しくなっているがゆえに、それらをシステム化、プログラム化していき、子どもの大脳を活性化させようとする「教育の目的」をすべて否定することは出来ないのかもしれない。

しかし、注意しなければならないことはプログラム化した刺激や体験を大人 によって与えられるという教育の片寄り、一歩間違えれば二重に受身の状態 を子どもの環境に作ってしまうことになりかねないという事です。プログラム 化して与えられたことを覚えたり、習得するだけではやはり自分で体験し、失敗 したり成功したりしながら発見するという能動性を伴うことは少ないといえます。つまり脳を活性化させるという中味も記憶力や思考力を高めるための“ある部分を刺激する”ということだけでは人間の能力の全体性が育つということにはならないのです。

では具体的に乳児教育の可能性をどのように考えたらよいのでしょうか？！

まず、ずばり「正しい子育て方法」など存在しないという事を言いたいと思います。なぜなら人間の子ども一人一人の発達は独自のなものだからです。もしも 方法があるとするならば、場面や状況に応じて必要な環境や手助けがその子の 育ちを支えるということです。特に赤ちゃん時代の受身になりがちな時期の教育は、そのほとんどが日常生活の環境の中に込められているといっても過言で はありません。赤ちゃん時代の脳の発達は五感(見る・聞く・触る・嗅ぐ・味わう)を通して、全体的に育っていくものだからです。

私達は日常の保育環境の中にそれらを充分に取り入れて、子どもが自ら育とうとする力を培うことに働きかけています。詳しく知りたい方はHPにアクセス、または保育ルームにお越しください。お待ちしております！

柏市駅前認証保育園 Kid's Encourage  
園長 日下部樹江

